

光村「国語デジタル教科書」を活用した国語科授業の提案

— 意欲的に学習に参加して、確実に国語力をつけるための授業 —

光村図書出版株式会社 開発部 森下 耕治

【はじめに】

コンピュータが入り、プロジェクタや電子情報ボードが入ると、確かに教室の風景は変わる。しかし、このような情報機器だけでは本質的な授業の変化は望めない。機器を生かし、日々の授業をサポートするソフトウェアを求める声は、ICT 推進役側からも授業者側からも日増しに強くなってきているのが現状である。光村「国語デジタル教科書」は、そうした声を受けて登場した、プロジェクタなどで拡大投影して使う提示型の教授用ソフトウェアである。教科書の内容を提示できるため、毎時間の授業で使うことができる。また、全員が一つの画面に注目しながら学習していくことで、学習情報の共有化が容易になる。その結果、授業に一体感が生まれ、教師と児童のやりとりを活性化することができる。ここでは、光村「国語デジタル教科書」の実際の授業場面に即した活用事例を紹介していきたい。

【実践事例の紹介】

■実践事例 その1 導入での活用

(四年上巻『伝え合う』ということ) <資料> 「手と心で読む」

教科書を見開きで再現する

挿絵、写真を拡大提示する

発問 タイトルの「手と心で読む」ってどんなことでしょう。 →内容を予想させながら、既習知識を喚起させる。
発問 点字について知っていることを教えてください。 →クラス中での知識を共有することで、教材文に対する関心を高める。



教材文の読解をする際に、前もって内容にかかわる言葉や場面を、タイトルや挿絵から想像させる活動がある。そのことによって、子どもたちは内容を理解する手がかりをたくさんもつことになり、いきなり教材の文章を読むよりも理解が深まる。「国語デジタル教科書」では、挿絵や写真のみの画面を拡大提示することができるため、教材に対する関心・意欲を高めるとともに、それを手がかりに読解を始めることができる。低学年に限らず、挿絵を見るところから読解の導入を行うことは、内容の全体を大まかにつかむことができるため、限られた時間内での読解活動に有効な手段である。

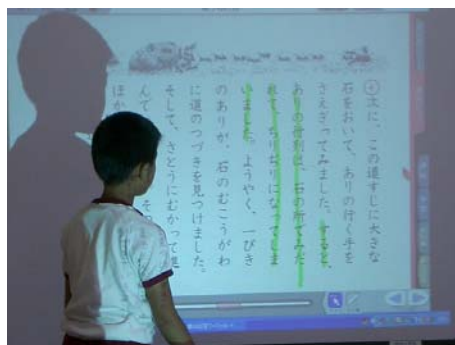
■実践事例 その2 読解指導での活用 (三年上巻「ありの行列」)

教科書を見開きで再現する (本文を拡大して提示する)

文中の「ちりぢりに」という言葉がどういうことなのかを、挿絵と文章を行き来しながら確認した。児童の考えを発言だけでなく、教科書中で示すことができるため、クラス全員で理解することができた。
--

教師の感想

教材文や挿絵に書き込みをして、一斉に学習内容を確認できることは、教室のすべての児童が同じものを見ることができ、今何をしているのか、友達が何を考えているのか、がよく分かる。



読み取った内容についてどの程度理解しているのかを確認するためには、分かったことや感想を発表させることが多い。その際には、どの言葉からそのことが分かったのか、どの言葉からそう感じたのかについて教材本文に立ち返り、常に言葉と向き合わせることが大切である。そのためには、立ち返った言葉や文章を板書として列記することも大切であるが、教科書本文中に示すことができれば、さらに理解が進む。拡大提示された教科書画面を使って、児童が自らとらえた言葉や文に線を引きながら発表すると、友達の見えや感想が見えてくるようになる。

■実践事例 その3 言語事項 (漢字指導) の定着で活用 (一年下巻「くじらぐも」)

筆順のアニメーションや漢字の用法用例を示す

低学年の文字や漢字指導は、ドリルと授業の中での空書きがほとんどである。空書きの利点は、体を通して筆順を理解させることにあるが、教師が児童の方向を向くと逆になることから、従来は黒板に向いたまま行うことが多かった。この場合、児童の筆順を確認することができず、指導に至らない。このような学習でひらがなや新出漢字ウィンドウの筆順アニメーションを使えば、児童の筆順を確認することができるため、指導が細やかになる。また、アニメーションの効果から、自然と点画の方向が分かり、字形が整えられるようになる。



なお、新出漢字ウィンドウは、教科書ビューや本文ビューの教材文から直接立ち上げることができるので、文脈の中で漢字をピンポイントで指導することができるので有効に活用したい。

■実践事例 その4 まとめで活用 (一年上巻「はなの みち」)

- 教科書を見開きで再現する
- 挿絵、写真を拡大提示する
- どこからでも朗読の再生が可能
- 補充、発展的な資料を掲載

登場人物が物語のどの場面に出ているのかを確認した。学習の最後にスライドショー（挿絵の提示と朗読）を見せて、物語全体を振り返った。

教師の感想

- ・教科書だけを使った学習とは違う、一体感、集中度を感じた。
- ・投影された大きな挿絵のなかで遊ぶ活動は、低学年の子どもたちに



読解の定着を確認する作業に、挿絵を使って登場人物の行動や場面の様子を発表させることがある。だれが、何を、どんな順序で行ったか、が理解できているかを確認するために、挿絵の順序を確認したり、登場人物の足取りをたどってみたりする。

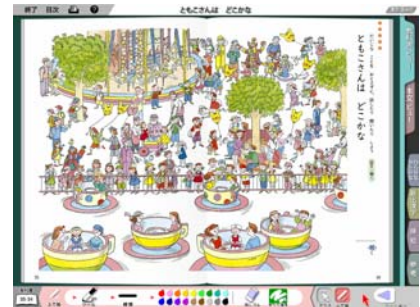
また、最後に朗読を聞く活動によって、学習した内容を確認するとともに、作品世界の楽しさを味わうことができるようになる。(次の場面を予測しながら聞くことができる。)

■実践事例その5「話すこと・聞くこと」領域で活用

(二年上巻「ともこさんは どこかな」)

- 教科書を見開きで再現する
- 挿絵、写真を拡大提示する

画面を拡大提示することで、全員が同じ画面を見ながら活動することができる。ペンツールを使って、見つけた人に印を付けると、活動が活性化される。また、教科書本文中にあるスピーカーマークをクリックすると、指導書に添付されている音声教材を再生できるようになっているので、話すことや聞くことの指導に活用したい。



■実践事例その6「書くこと」領域で活用

(四年下巻「生活を見つめて」)

- 教科書を見開きで再現する

児童作品例と構想メモや解説文の関係を、教科書を示しながら指導できる。マーカーの色で印を付けるだけで説明しやすくなる。また、参考ウィンドウには、文の構成や書き方のポイントを示した教材が用意されているので、適宜活用すると効果的な指導が可能である。



【まとめ】

三年生上巻「ありの行列」の学習ページには“「ありの行列」を読んで、はじめて知ったことやおどろいたこと、ぎもんに思ったことを発表しましょう。”とある。普通の授業では児童が発言して教師がそれを黒板に書きとめる。これを拡大提示したデジタル教科書に線を引ながら行くと、授業の分かりやすさはどうであろうか。教材文を確実に読み取り、それを元にした意見交換は国語学習の基本的な展開である。全員が一文に集中する授業をコンピュータが助ける時代。それがポスト2005年である。

※授業実践：愛媛県味酒小学校石田年保教諭、ほか2 教諭